



責任感を養い 人間的・人格的に成長できた

佐野 和夫

Sano Kazuo

(一社) 日本知的障害者水泳連盟会長
(一社) 日本ウォールハンドボール協会会長
(公財) 日本水泳連盟前会長
東京YMCA運営委員

▼ YMCAキャンプとの出会い

中学生時代、兵庫県西宮市に住んでいた頃、神戸YMCAにクリスチャンの母親に連れて行かれたことがYMCAとの出会いでした。そして小豆島の余島キャンプがYMCAキャンプの最初の経験でした。

余島キャンプ場の自然環境の素晴らしさと、キャビンリーダーの武田建さんや宮田ミッチャンリーダーの印象、親しみやすさ、人物像、などがとても良かったので、中学の3年間欠かさず余島キャンプに参加していました。

▼ YMCAの活動について

神戸YMCAではキャンプの他にも、少年部の週末の活動に参加していました。体育館でいろいろなゲームやスポーツをする体育館活動や文化活動があり、少年達を活性化するための種々のプログラムが組まれていました。今も思い出のひとつに残っているのは「鉱石ラジオ」の製作でした。完成時に「アーツ聞こえる聞こえる！」と言って仲間達と大変喜んだことを覚えております。

高校生からは東京に転居し、東京YMCAの少年部同期のグループ「モルモット」に入会すると同時に、体育館にも通いました。得意の水泳でプールに通っているうちに、水泳のクラブ「緑泳会(少年部)」を結成し、後に「朗泳会」にも入会して活動しました。

東京YMCAでは、神戸Yの余島キャンプの経験が忘れられず、長期少年キャンプ「野尻学荘」に参加しました。余島も野尻も共通して素晴らしいと思ったことは、長期間一人自宅を離れ、自分ですべて責任を持って生活すること、またキャンプソングが繰り返し多くの機会に歌われ、食事の時もファイヤーの時もいつも楽しく歌ったことです。キャンプソングは、一度覚えると忘れられないところがとても印象深いですね。

一九五七（昭和三十二年）年春、「モルモット」の活動で、東京YMCAと観音崎へハイキング。後列左から六人目が佐野氏。



そのうちに大学生になると、少年部からキャンプにリーダーとして参加しないかと“バンケン（齋藤實主事）”から勧誘を受け、野尻学荘にキャンプリーターとして参加しました。

野尻学荘では、大学生になると、1年目はリーダー見習い、2年目からは本格的にリーダーとして活動しました。ボーイズと共にキャビン生活をするキャビンリーダーや、水泳のリーダーをやりました。特に私は水泳の専門家として見られていたので、水泳部門のリーダーとしても請われて参加しました。野尻湖キャンプサイトの栈橋前の一角にプールを形成して、水泳プログラムを楽しんだことが良き思い出となっています。

その他では、観音崎の小学生キャンプあるいは小学生のスキーキャンプ、小中学生の水泳教室など少年体育の普及に、リーダーとしてボランティア活動を行いました。また、欧米では盛んなスポーツですが、日本では草分けとなる「ウォールハンドボール」を体育館コートでプレーしたのもこの頃でした。

社会人になってからは、会社（日本鋼管）の水泳部監督に就任することとなり、YMCAから遠ざかっていましたが、東京YMCA 2代目体育館のときには、YMCAからの要請で水泳部員であるオリンピック選手を連れて模範泳法を披露したりして、水泳競技のプロモーションに協力しました。その後の3代目の体育館建設時には建設委員をとの声がかかり、新体育館の企画検討に対する協力を引き受け、新体育館建設の工事中には東陽町ウェルネスセンターにも通いました。他には社会体育専門学校の運営委員としても参画し、学生のプログラム活動の工夫やレベルアップに努力し、尽力したことを鮮明に覚えています。

▼心を裸にして築く信頼関係

自己の独立自尊、すなわち何事も自己完結して、責任をもって人とのおつきあいをしていくということが身につきました。YMCAの長期キャンプでは、本当に人間どうしがよく見えるようになり、お互いカモフラージュしているところが全て裸になることによって、信頼関係が作られていきました。

一方、キャンプリーダーを務めているときは大変でした。「わがままな奴がいたらガツン」とやりたくなるのですが、それはYMCAの精神に反するので、諭さなければいけない。そういうテクニックも次第に身につけていき、人を指導していくことが少しずつできるようになったと思います。それらは、その後のコーチングテクニックとして、非常に役に立ちました。会社の水泳部内では、まさに暴力などふるえない社会人の環境ですので、そのリーダーシップが大いに生きてきたことは間違いありません。

YMCAの“Spirit”、“Mind”、“Body”の三角形の調和を学び取ることができ、人間的・人格的に成長できたのだと思います。

▼100年経ってもキャンプは変わらない意味がある

時代が変わっていくとともに、子どもたちの成長過程の環境も変わっていきますが、キャンプ自体は100年たっても発展こそすれ基本的には変わらないと思います。

一般の家庭生活の一部が場所・条件を変えて新しく変化した未経験の環境で生活し、適応力を養成することに意味があるのだと思います。

また、せっかく多種多様な環境の異なる人間が一堂に集まって一つの共同生活を営んでいくのですから、社会的な学習ができるプログラムを考慮して取り入れるとよいと思います。例えば高校生・大学生はいずれ社会に出る訳ですから、社会に出たときの適応力・処世術を少しでも学べるように、社会を想定して学習できるプログラムを、可能な範囲でキャンプの中に採り入れてほしいと思います。

こうしたキャンプ生活での人と人との交わりの中で、人間性が伸び、人格が養われるということを知り、今後大切に、慎重に、そして大胆に、キャンププログラムを推進してほしいと願い、期待しています。

Profile



慶應義塾大学工学部計測工学科卒業
米国ペンシルバニア大学院化学工学修士課程卒業 東京大学工学博士
日本鋼管(株)〔NKK～現 JFE〕水泳部監督・総監督
(公財)日本水泳連盟会長、アジア水泳連盟(AASF)副会長
国際水泳連盟(FINA)理事、などを歴任、現在はアジア水泳連盟名誉メンバー
(公財)日本水泳連盟名誉顧問
(一社)日本知的障害者水泳連盟会長
(一社)日本ウォールハンドボール協会会長。
YMCAでは、社会体育専門学校運営委員や体育館建設委員として奉仕